

横浜国際港都建設審議会

第3回 第2部会（グローバル化関連）

平成17年9月8日（木）

《出席委員》小林重敬委員（部会長）、飯沢清人委員、加納重雄委員、黒川勝委員
志村善一委員、高梨昌芳委員、トイ チャールズ ファウラー委員、萩原なつ子委員、
長谷川まや委員、横山正人委員、吉村恭二委員
＜欠席＞岡部明子委員、ベルティイ イラティ チャンドラウィ委員、森敏明委員

議事

【部会長】 時間になりましたので、第3回の第2部会を開会させていただきたいと思
います。

本日、高梨委員が初めてご出席ですので、自己紹介をお願いいたします。

高梨委員自己紹介

【部会長】 それでは、既にお手元に渡っていますが、事務局から前回、前々回の部会
で議論した内容を取りまとめて、来週予定されております第1回の起草委員会に向けて、部
会としてどのようなものをまとめとして出していくかということについての素案、ある
いは材料が整理されてございますので、まず最初にその資料を説明いただいて、その後、議
論させていただきたいと思います。

早速ですが、事務局からご説明をお願いします。

事務局より資料説明

【部会長】 どうもありがとうございます。我々の議論を資料2のような形で、これから
の取りまとめの素材として提供いただきました。資料1と資料2を中心に、あるいは今日
ご出席の委員の中で、資料を提供いただいている委員もございますので、このような資料
をもとに、どこからでも結構ですので、ご意見いただければと思っております。どうぞ。

【委員】 環境のところで、ちょっとつけ加えさせていただきたいと思います。

実は今、中央環境審議会で、環境基本計画の第3次見直しが行われていまして、私も委
員として出席しております。今、各団体から中間まとめに対するヒアリングをしているん
ですが、今日は環境教育関係の団体のヒアリングをしてきました。その中で、CO₂削減

を目的に新エネルギーというものをもっと身近なところに導入する方法として興味深い例がありました。全国小・中学校環境教育研究会の会長の方のお話だったのですが、江戸川区の取り組みとして、各学校に風力発電や雨水利用の樽が置いてあって、子供たちがCO₂削減に向けての行動を学校の中でやっていると。そして、競争がいかどうかわかりませんが、削減率がきちんと表になるらしいんですね。そうすると、自分たちの努力が目に見えると。このようにCO₂削減することがどういうことを環境教育として、実践していて非常におもしろいなと思いました。

この横浜でも、既に新エネルギーを導入しているいろいろ頑張っていると思うんですが、もっと市民に身近に感じてもらうには、すべての学校に風力発電があることが、もしかしたらいい方法かなというふうに思いました。なおかつ、その効果としては、大体、大人が子供に環境教育をという視点が多いと思うんですが、そうではなくて、逆にそこで学んだ子供たちが家に帰って親に教えると。お父さんが水を流しっぱなしにして歯磨きをしていると水をとめにはいるとか、どンドンプラグを抜いていくとか、そういう効果があらわれてくるということで、環境教育の視点から、新エネルギーが入ってくるとおもしろいかなと思います。もちろん省エネもどンドン進めなきゃいけませんけれども、今後の課題として、新エネルギーにどういうふうに横浜市として取り組んでいくかというのが非常に重要な課題ではないかなと思いました。

それから、あともう2点ですけれども、もう1つが、例えば今のアンケートの中の横浜を最もよくあらわすイメージに海と港とありましたけれども、やはり環境ということは、単なる自然環境のみならず、地球温暖化というだけでもなく、地球レベルの環境問題というだけでなく、人々を取り巻くすべての環境ということになると、この前、横浜市の人と話したら、環境の港というキーワードが出てきまして、横浜というところが、ありとあらゆる環境に関する情報発信の場であったり、人が集う場であったり、ネットワーキングする中で解決方法を出していく場であったり、そういった意味で港というのはとてもいい言葉かなと思ったので、環境の港なんていうのをどちらかに入れていただけるといいなと思いました。

そういう中で、環境問題の解決ということから考えますと、やはり企業そのもののエコ化ということも重要ですが、環境問題の解決のために、さまざまな主体が協働して環境問題を解決、相乗効果を上げていくという意味でも、その場として、この横浜がそういう発信の場となっていく必要があるのではないかなというふうに思いましたので、ちょ

っとつけ加えさせていただきたいと思います。以上です。

【部会長】 今のご意見、例えば資料2の中で考えると、一番最後の環境と経済の調和というふうにとらえられているところですね。この中に、今のご意見を要素としてイメージ、キーワードの中に入れるのは、入れられると思うんですね。ただ、都市像の方向性の中に具体的にそれをどう表現したら趣旨がわかるかというふうに考えてみたときに、1つは教育の議論ですね。ここでは市民一人一人というふうに書いてあるんだけど、具体的にそれを実現するためには、むしろ子供のときの教育から始めるということの必要性をもう少し強くうたったほうがいいのではないかというご指摘というふうに従ってよろしいでしょうか。

【委員】 はい、結構です。

【部会長】 ほかにいかがでしょうか。

【委員】 1つは真の国際化と書いてありますけれども、言葉が十分でないですが、国際化というのは、むしろ地球市民意識というものを持った人というふうには、その意識を強めていくというふうには考えれば、国際化というのは単に違う国の人と握手をして交流をしてというよりも、もちろんそれに加えて、一番根底の中で環境とか貧困とか人権問題にきちんと取り組んでいこうと、あるいはそういう意識を持った人が育っていくまち横浜というふうには考えて、これが1つ大切なんじゃないかと思います。言いかえれば、ソフトエネルギーを横浜だけが共有するんじゃなくて、それは地球全体の中でつながっているんだと。その意識を強く持つていくことが必要なんだと多分、おっしゃりたかったんだろうと思うんですが、ぜひそのことを考えてほしいと思います。

それから言いかえれば、いわゆるグローバルという立場でちょっと発言したのですけれども、例えば横浜の中で、給食の廃棄物をうまく活用しながら地域にそれを還元をして、例えば豚のえさになるとか肥料になるとか、そのことが、また学校を中心とした、家庭と学校をつなぐコミュニティーを形成していく。結果的にそれは地域の問題、あるいは食料を廃棄するというだけの問題ではなくて、それが地球全体の資源につながっているんだということをどのように食を通して地球環境の問題を考えるか、それぞれつながっている部分をうまく表現できないかなというようなことを思っております。

【部会長】 私もこの表を見まして、ちょっと見ていただきたいんですけども、最初は世界から始まって、横浜の周辺を含めた都市、次に横浜の都市の中の構造、さらに地域になって、最後は環境を意識する一人一人の市民と、大きいものから小さいものに、事務局

がきれいに整理されているんですけど、ただ一人一人の行動が最後に地球のほうにまた戻っているという、こういう循環の仕組みですね。ですから、この表、確かに縦に整理されているんですけど、結果が最後に世界に戻っていくという、そういう表現をうまく表現できると、今の趣旨が非常にわかりやすく表現できるのではないかなというように私も思います。どうもありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

【委員】 今日、資料をお持ちしましたので、いくつかそれに基づいてお話をさせていただきます。実は、先週末に横浜経済人会議というシンポジウムを横浜青年会議所で行いまして、そのときに出させていただいた資料でございまして、まさに市民がつくる政策提案の1つという形の中で、横浜JCマニフェストというふうに名づけてつくらせていただきまして、本会議の趣旨とも非常に合っているものではないかなというふうに感じています。この資料2の目指すべき都市像の検討素材の横浜アピールの中で、世界標準化が進む中で地域固有性の尊重、また横浜らしさや横浜の強みの明確化というふうに表現されているんですが、我々も横浜で働く者として、ある意味、世界標準いわゆるグローバルスタンダードに対して、横浜スタンダードという、横浜の人間は横浜らしいことをきちんと横浜らしくやっぺいこうじゃないかと、横浜の会社として、そういう部分で認められていこうじゃないかというようなことで、こういう認定基準をつくってはどうかというように提案させていただきました。先ほど言われましたような環境の保護であったりとか、また、女性が働きやすいとか、障害者の雇用をきちんとするとか、ニートの問題なんかも含めて知的財産の流通保護、あるいは国際化、最後に横浜らしさというふうに入れさせていただきましたけれども、こういったさまざまな指標の中から、きちんとそういうことをクリアしている会社に関しては、横浜スタンダード型の企業ということで認定をして、そういう会社にはきちんと例えば横浜市のお仕事を出すとか、横浜の中できちんと仕事がネットワークできるようにするとか、そういう形で横浜の企業が、いわゆる世界の中でも先進的なレベルに、こういう指標が達することができれば、世の中はよくなっていくのかなというような、そんな思いからこのような企業認定制度を提案させていただきました。

今、例えば横浜市の入札制度の中でも、ほんとうに入札の落札価格というのがどんどん下がってきてまして、安かろう、悪かろうみたいな形で仕事を出して、仕事をとった会社が結果として自転車操業みたいな形の中でパンクしてしまうとか、あるいは、こういった女性に優しいとか障害者雇用をきちんとしているとか、環境保護に対してしっかり理解を

しているとか、そういうような会社が仕事をとるには、そういう部分にかかわる経費がある程度かかってしまう以上は、なかなか横浜市の入札で仕事が落札できない。こういうしっかりしたことをきちんとやっている会社がきちんと仕事をとれるようになって、そして適正な利益を上げて、そこから適正な税金を払って、その税金がまた行政に還ってくる、そんなきちんとした循環ができるようになっていけば、必ずもっと世の中はよくなっていくんじゃないかな、もっと働く人も働きやすい世の中ができていくんじゃないかなと、そんな思いから考えてみました。

それともう1つ、一番上の国際人・人材育成に関しましては、横浜人という表現がされていますけれども、私はこの横浜人という言葉は浜っ子という表現でいいんじゃないかなという気がします。江戸っ子というと大人の人も子供の人も東京の人は江戸っ子みたいなことを言われますけれども、浜っ子という表現もある意味、子供に限らず39歳の私も浜っ子だという認識です。3日住んだら浜っ子という言葉は私もいろんなところで言うんですけども、横浜というのは非常にウェルカムなまちといたしますか、だれでも受け入れる、そういう受け入れやすい土壌を持ったまちなのかなと思います。どんどん日本中から、横浜っておもしろいまちだなというふうに思っている人たちが横浜に来てくれて、横浜のまちというのは小さな山村から350万の都市に、わずか150年でなったわけですから、そういう意味では、だれでも来た人は3日住んだら浜っ子になれる、そんな意識の中で、だれとでも仲よく、だれでも受け入れてあげられる、海外の人でも受け入れてあげられる、どんな宗教の人でも受け入れてあげられる、そんなまちが横浜なのかなということを端的に表現しているのは、この3日住んだら浜っ子という言葉なのかなというふうに思います。ぜひ、そんなことで、浜っ子という言葉そのものが日本の中での国際人みたいなふうに、日本のさまざまな都市の人たちも、ある意味思ってる部分もあるんじゃないかなと思いますので、そういう言葉はできましたら大事にしていきたいなと思います。

それともう1つ、文化芸術活動を支える都市環境の整備みたいな部分で、文化芸術に関する部分に関しましては、この横浜JCマニフェストでもコンテンツ産業という部分に関して非常に着目をしておりまして、コンテンツビジネスみたいなものに関しては広い意味での新しい現代アートといたしますか、情報文化という部分にもつながってまいりますし、日本の今一番大きな、将来伸びるであろうと言われているビジネスの1つだと思いますし、こういうコンテンツビジネスみたいなものが横浜から発信していくことができるようになれば非常に面白いのではないかなというふうに思います。

【部会長】 3点ご指摘いただいたわけですが、1点目の企業、先ほど紹介していただいた企業のスタンダード型企业認定基準ですか、この議論、大変興味深いのですが、具体的に、例えば資料2のペーパーでいうと、どこにどういう形で入れたらいいのかなど。1つは一番最後に市民一人一人ではなくて、企業もという形で入れるという案があります。そのような形で入れた場合に、それで落ちつきどころがいいのかどうかという議論も、できたら後でご意見いただきたいと思います。

2番目、3番目のご議論は、まさにそのとおりで、この中にうまく組み入れられるのではないかと考えておりますが、私は特にその中で、コンテンツ産業と創造性の議論が、横浜市の市の施策としていろいろやっつけてらっしゃるので、それをもっと積極的にどこかで表現できないかなという思いは確かにあります。ありがとうございました。

ほかにかがでしょうか。どうぞ。

【委員】 2つほどございまして、1つは今、最初のほうにお話にございました、市民の意識を変えていくという点なんですけれども、今回のビジョンを策定するという取り組みは、1つは市民の意識を変えろとか行動を変えていくということをすごく期待されていらっしゃるんじゃないかなと感じております。意識改革を行う場合に、目標がクリアになっていて共有されるというのは、企業であっても難しいのに、こういう市民を変えていく、行動を変えていくというのはいかに難しいだろうと思います。こういったビジョンを策定していくという中で、前回も少し申し上げたんですけれども、できるだけ具体的に市民がどういうふうに行動していかなくちゃいけないのかということ表現できないかなと思って、今回の論点の5つの枠組みからちょっと外れてしまうんですけれども、資料を準備させていただいて、これに基づいて若干、全くの私案ではございますけれども、私たちに求められている行動みたいなことを私の私案として発言したいと思っております。

既に議論されていることなので、3枚ほどのホチキスでとめていただいている資料がございまして、横浜の将来像については、今まさに検討されていることだと思います。これを実現するための要件を考えたときに、やはり市民が変わっていくことが必要なんだろうなというふうに思っています。多様性を受け入れるということ、これは横浜のまさに特徴なのかなということ最近認識してきまして、それを生かしたようなこと、私たちがそれを強みとして変えていくことができたかなというふうに思っています。私たちに求められる姿勢というところを、ちょっと特に強調したいなと思っておりますけれども、やはり私たちが市に帰属意識を持っていたり参加意識を持っていたり、意識調査を見ても、

若干、少し私の過去の経験から見ても、若干消極的なところが感じられるように思います。やはり、今回こういう貴重な機会をいただきましたけれども、こういったすばらしい審議がされていて、すばらしい取り組みとか特徴を持った地域に私たちはいるという帰属意識とか、もっとこれに参画していくような意識というのが求められているのかなと思います。他者に対してというところですけども、個人が頑張るだけじゃなくて、競争みたいなものがあるかわからないんですけども、やはりほかの人と比較して、自分がどのぐらい頑張っているのかなということが可視化されたりですとか、そういうことは1つのモチベーションになるのかなと思うし、そういうことで貢献している人を評価するというか、尊重するという姿勢というのは求められているんだろうなというふうに思います。

2つ目のところは、施策例としてご検討されているようなことが多く重なっているので、少し割愛をしたいと思いますけれども、ただグローバル化という意味では、外国人の方から選ばれるようなまちになってほしい。それはどんなまちだろうかというような条件を明確化することによって実現していく。これはおそらく、日本人にとっても魅力的なまちとなるだろうというふうに私は信じています。

3枚目のところですけども、こういった施策を進めていく上で非常に僭越ではございますけれども、行政とか企業、行政についてはあまり大きなことを申し上げられるような立場ではないんですけども、特に私たちにとって、市民に求められている役割というところを少し考えてみたいなと思ひまして、3枚目のほうにまとめています。

社会とかかわりたいとか自己実現をしたいというような欲求を持つ市民が増えてきていると思ひまして、それを実現するために私たちが今できることって何なのかなというところ、まず地域社会を活性化することの重要性とか必要性というのを認識することに始まりまして、今どれだけ私たちが横浜市のことをよく理解しているのか、こういった取り組みが行われている、例えばこの前のシンポジウムも、すごくいい取り組みだと思うんですけども、必ずしも参加者の方というのは、会場がいっぱいになっていなかったのかなと、ちょっと寂しく思ったところもありまして、ああいう機会をもっと活用できることを市民の方に知っていただくことができたかなというふうに感じています。

それで、どういうふうに参加できるかということ議論する機会も活用するべきだというふうに思ひますし、そういうことをしている人を奨励していく。また、貢献するためには個人がみんな成長しないといけないと思うんですよね。その成長をお互いに助け合うというようなことでしょうか。自分が強いところをほかの人に教えてあげるとか、お互

いに学び合うということですね。それは今、対面で、フェース・ツー・フェースで行わなくても、いろんな形で学習ってできますので、そういうコミュニティーみたいなものができたらおもしろいなというふうに思いますし、貢献するというのはいろいろな形があるということとそのような機会を広く知っていただけるようなことができたらなというふうに思います。そのために、行政とか企業とかが今後取り組むべきこととしては、市民のためにやっているというのではなくて、そういった市民を参加させるというんですか、リーダーシップという言葉を使ったんですけれども、市民が参加することに対する求心力のようなものを行政が担っていくのはどうかなというふうに考えています。

企業の方にもいろいろ苦労はあると思うんですけれども、やはりCSRの観点で、返ってくるものだというふうに私は信じています。社会貢献をしていけば、それは何かしらの形で企業に返ってくるもので、それは今まさに注目されていることでもあるので、そういった意識を企業の方々にも持っていただく。僭越ではあるんですが、市民の行動ですとかをより強調することを目的に、今回、こんなような形で自分の考えをまとめてまいりました。

【委員】 今の意見は大変重要なことだと私は思います。だれがどうやってやるかということが非常に大事なんでして、市への帰属意識、これも私は非常に大事なことだと思います。そのためにどうするかということがいろいろ書いてある。きちんと目的をはっきり、みんなで共有のものになって、そのために多少のリスクとか負担を負ってもやるんだと、そういう認識体制ができなければ、いろんなことを言ったってできないと思うんですね。やっぱり、そういうことに耐えられるような案をつくらなきゃいけない。したがって、私はやっぱり裏づけのある、実効性のある案をつくらなきゃいけない。実際に実効性のある案をつくって、説得性のある案をつくって、市民の皆さんを仲間にほんとうに入れたいいけない。これは非常に大事なことです。そういうことを通じて、横浜という都市をほんとうに好きになっていただくということが大事だと思います。ふるさとですね。ふるさとというのは生まれたところだけの意味じゃない。ふるさとというような愛着を横浜市に持っていただくようになれば、いろんなことが進むというふうに非常に強く思いました。

それから2番目の実現する施策例もおっしゃるとおりだと思います。これらすべて、そういうことだなと。特に外国人が起業したいとか、住みたいとか、学びたいとか、外国人と結婚するとか、たくさん出てきますね。このときにもう1つ重要なのは、何十年か後の間には、もし外国人の方がこちらに来て、社会保障の制度とか医療制度だとか、あるい

は教育制度だとか、そういうものもできれば整備していくといいなと、整備できるような都市、国ができなければ都市というようなことも裏づけとしては非常に大事なことだと思います。とにかく外国人が住んでいる住宅とか、そういうことについても、もう1回整理をしなければいけないと思いますが、これは大変だと思います。

次の3ページ目、この役割分担というのは、これから横浜市にとっても、都市にとって非常に大事だと思います。それから行政に対してリーダーシップをお求めになるということも私は大賛成。同時に一人のリーダーシップではいけないわけですし、多数のそれに伴う指導者をつくらなければいけないという意味で、さっきの市民の帰属意識とかいうようなことを組織化しなければ実行に及ばないと思います。

ちょっと長くなって申しわけございませんが、企業の問題は、ここに書いてあるCSRはよくわかります。しかし、この行政との間の場合に、CSRという感覚だけでなく、今いろんな官から民へというような問題がたくさんありますね。そういうときに、企業あるいは企業を運営している者たち、あるいは業を行っている弁護士さんや何か、そういう方たちがどういうふうに官の仕事を受け取れるかということを考えなければいけません。今、行政がおやりになっていることは、今ある行政の官の仕事を民にやらせるということが1つの形だと思うんですね。それはすぐ終わると思います。指定管理者制度などはやればよいと思うんですけども、しかし、その次には役割を、今やっている仕事は何なんですか、それをよく整理して、やれる形につくっていくと、これが10年、20年たったときに生きてくるシステムになってくると思うんですね。これをお互いに探さなければいけません。これが私は企業とか、企業を運営するような経験、知識のあるものがこれから心がけなければいけない大きなテーマであると思います。この部分はちょっと足していただければ、私は大変、役割分担を含めて大事なことだと思います。ありがとうございました。

【部会長】 今のお話にかかわって、何かありますか。よろしいですか。

【委員】 今、ふと思い出したことがあります。夏、オーストラリアのゴールドコーストの近くにある大学院に通ってまして、短期間なんですけれども、ちょっと行ってきました。そこに行ったときに、世界中から観光客が集まっているまちだということに驚いて、それから日本人の女の子なんかワーキングホリデーで働いていて、観光に貢献して、ツアーガイドなんかをやっていて、私のような日本人の学生もたくさんいて、その大学にはいろいろ世界中から学生さんが集まっていて、ゴールドコーストってすごく小さなまちだと思っていたんですけども、観光も魅力的だし、世界各国から働くことと選ぶ人もいる

し、学びに行く人もいるし、非常にすばらしいまちだなど、今までなかった発見をしました。だから、外国人が選ぶまちって、そういうゴールドコーストなんか1つ参考になるものがあるのかなんていうふうに思って帰ってきたことを思い出しました。

【部会長】 ありがとうございます。我々が構想をつくる時に、従来ですと言葉をいかに表現するかということで、わりあい、抽象的な言葉をかなり整理して並べるということをやっていました。しかしながら、ここでは都市像のイメージ、キーワード、さらに具体的なアイデアを含めて、さまざまな具体的な言葉、さらに施策、それをどのように組み入れられるかを検討したうえで、その結果として、まとめとしての都市像の方向性が表現される、そういう操作をやりたいというふうに考えております。言葉から入っていくのではなくて、どのようにやるかという具体的なイメージから言葉をつくり出していき、それが構想ではないかということで議論しております。

【委員】 言葉遊びにならないような会議にしなきゃいけないので、今言ったように実質的なお話というのは、何かに残しておく必要があるとは思いますが。せっかくこれだけ集まっているんですから、整理すれば、先生おっしゃるように、ある言葉になると思う。ただ、今のようなお話をせっかく出てきたものを、どう蓄積して実践段階でお互いに使うかというのは非常に大事なことだと思います。

【部会長】 まさにそうです。ですから、細かい表現も、できれば構想だけではなくてストックさせて、我々の部会の材料として、それもまとめて出したいと思っております。

【委員】 どうぞよろしくお願いいたします。

【部会長】 ほかにいかがですか。どうぞ。

【委員】 今、部会長がおっしゃっている具体的な内容のお話なんですけど、事務局で取りまとめたいただいた資料を見ていると、アウトラインでは非常に具体的なご意見なり方向性なりが示されているんですけども、この検討素材の段階になると、少し抽象的な表現が多いように思えるんですね。まとめようとするとか、全体を網羅しようとするから抽象的な表現になってくると思うんですが、ほかにいただいている資料の他都市の基本構想などを見ると、具体的な数字が入っていたりとか、方向性を示しているんですね。ですから、確かに全体を網羅しているとかまとめていくという方向性は必要なんですけれども、具体性に乏しくなってはいけませんので、やはり具体的なアイデアを盛り込んだ形で検討に入ったほうが私はいいのではないかなというふうに思います。例えば地域のまちづくりのところ、18区役所を中心とした協働のまちづくりとあるわけですが、協働のま

ちづくりをしていこうというのは市民共通の認識であると思うんですけども、それでは、その市民の役割というのはいかにか、役所はどういう働きをしなきゃならないのか、市民はどういう立場にならなきゃならないのかというような方向性を具体的に出していくべきじゃないかなというふうに思います。

【部会長】 今のお話は、そもそも構想のつくり自体をどのようにするかというご提案と受け取ってよろしいですか。おそらくほかの部会との関係もありますので、1つのお考えとして皆さんのご賛同を得られれば、第2部会としてそういう方向性はどうかということとを来週予定されている起草委員会でご提案したいと思いますので、それも含めて、もしご意見があればいただきたいと思いますが、その前にどうぞ。

【委員】 農業について発言させていただきたいと思います。前回の会議でも発言させていただきましたように、横浜には神奈川県下では一番多い農地面積があるわけです。今、3,400ヘクタール余りの農地があるわけですが、20年後の横浜にはどれだけの農地が残るかという、皆目わからないわけです。今の都市農業は住民の皆さん、市民の皆さんに理解を得られないと、なかなかやっつけられないわけです。ですから、この構想の中で、住民の皆さんの理解を得る、そして役所にどうやっていただく、農業者はどうやるべきか、この3つの方向性を出しながら、20年後に横浜にはこれだけの農業を残そうというような方向に行けばいいなと思います。やはり、そうしないと、今後は横浜農業も、それぞれ全国的なペースでどんどん落ちていきます。ペースが一番遅いでしょうけど。ですから、そういうものを残すために農業者としては努力すべき点、農業は自然相手ですから、やっぱり住民にもある程度理解していただかなきゃならない面、また行政の支援がなければ、当然やっつけられない部分もあるわけです。税制とかいろんな面で、農業環境において。また、農業には自然に触れていやし効果もあるわけです。私どもも同じ農業者でありながら、北の者は南の農業環境を全然知らないわけです。また南のほうの者が北のほうへ来ますと、このような農業があるのかということで、農業者であっても、そのような初めて経験する感動があるわけです。ですから、それらを今度は観光として、よそから横浜に来れば港であり外人墓地であり中華街でありだろうけど、こういう農業の観光ルートみたいなものもできるんじゃないかと、そういうことも農協としても考えているわけです。そういうことで農業を横浜の財産としながら考えていく必要があるんじゃないかなと私は思うわけです。

【部会長】 横浜は神奈川県で一番農地面積が大きい。それはおそらく市民の方、情報と

してお持ちでないだろうと思います。この構想の中で、横浜は現在、神奈川県で一番農地面積が多いと。その農地面積を今後どのように活用し、従来の農業機能だけではなくて、いろんな機能を生かし、環境面その他に寄与できるような、そういう仕組みにどう組み立てていくかというようなことを例えば表現するというのは、先ほどの骨子と合っている。市民も具体的にそれをイメージできる。ぜひ、そういう表現を今回、構想の中に組み入れていきたいというふうに思っています。どうもありがとうございます。

【委員】 今、農業の話が出ましたけれども、コンパクトな都市を目指すことになるんだと思いますので、中心市街地の再生は大事なことだと思います。

コンパクトな都市を作らなければいけないというのは非常に大事なことだと思っております。自分の都市の一番大事なものを大事にしなきゃいけないということは、こういう構想つくるときのポイントだと思います。そのときに、当然、土地があくわけですね。何十年か後、人口が減るわけですから、豊かな生活をしたいくなるわけですから、当然、コンパクトな中心市街地、都市構造を描きながら、一方では郊外に大きなスーパーをつくったりというような、車社会みたいなことが少し是正される場合があると思います。そのときに、もう1回横浜というところは、里山ができたり、それから緑ができたりということが、流れとしても出てくると思っています。そういう中で、今、部会長さんがおっしゃったように、その中で農業はどのような特性がある農業をやるんですか、里山はどのようなふうにもみんなで使うんですかというようなことを一例にすれば、大きな特徴になるんじゃないでしょうか。

【部会長】 ありがとうございます。ほかに、どうぞ。

【委員】 多少、今の議論とも関係があるんですけども、まず1番目の国際人・人材育成という中で、イメージ図の中で国際都市横浜と世界というふうに図は飛んでるんですが、私はやっぱりアジアという中に位置する、格別にアジアの各都市と一緒に交流し合っていく、そして世界の各都市と交流し合っていくという都市間交流が必要だと思います。いきなり世界という抽象的な概念ではなくて、むしろアジアの中の魅力ある教育、文化、経済の中核になっていく、中核都市としての横浜、そしてそれをつくり出していくために、とりわけアジアの都市との交流を大切にすることが重要だと思います。

私は、アジアのキーワードの1つは農業だと思っています。豊かな自然の中に、これはおそらく失礼な言い方ですが、アメリカとかあるいはヨーロッパとかのイメージよりも、むしろ今、アジアが一生懸命自然との保全とか環境の保全と戦っているさなかだと思いますので、そういうところと連帯をし、協力し合っていく都市間交流が必要です。そういう

意味では、例えば農業者の交流なんかは、横浜の農業の方々が他のアジア都市との交流というふうなことの中で、いわゆる一般的な市民というところからもう少し特化した形で、農民同士の交流とか、あるいはそういう意味での都市間交流というものを、もうちょっと力点を置いていいんじゃないかということと、アジアということに関連したらどうかというふうに思っています。私ははっきりわかりませんが、20年ぐらいのうちに、相当中国、韓国、あるいはいわゆる東アジアなどが、もっともっと近い関係にいくだろうと思います。そういう意味では、例えば教育の中における言語も、アジア言語をもっとたくさん我々が横浜の中において学びとって行けるような、若い人を育成していくということもとても重要なんじゃないかということを思います。以上でございます。

【部会長】 どうぞ。

【委員】 今日は第2部会の3回目で、在日外国人の話はよくやってきたという気がしまして、すごく重要な課題になっているという気がします。

そして、それ以上に国際交流がすごく素晴らしいものなんですけれども、実際にやってみようと思うと、そんなに簡単なものではなく、難しいんです。私は移民がたくさん混ざっている国から来ましたが、アメリカは移民問題とかがまだすごい顕在化していて、大変な状況になっているんです。アメリカの移民問題というのは、大体ラテンアメリカから低所得、教育水準が低い人が経済的な必要性でアメリカに入ってくるんです。それは日本の在日外国人に大きな共通点だと思います。日本に入ってくる外国人は、ほとんどが近接にあるアジアの各国から入ってきて、中国とか東南アジアで、その人は日本人と比べたら教育の水準とか所得の水準がまだ低いところにありまして、そういう人と交流するのは難しいですね。交流をもう少し強化するためには、お互いの状況を理解し合える必要があると思いますので、コミュニケーションがとても重要です。

そのようなコミュニケーションのとれる仕組みとか場所が極めて重要だと思っていて、具体的に何ができるかというところ、もっとローカルなスケールで、町内会で周辺に住んでる外国人を紹介したり、その町の祭りに参加してもらったりすることがいいのではないかと思います。私は去年、弘明寺でおみこしをやって、その周辺の人たちと顔合わせができ、すごく仲よくなったりできて、非常にいい経験でした。

ちょっと話は変わるんですけど、さっき農業という話が出てきましたが、世界の中であんなに大きな都市であるニューヨークに有機コミュニティーガーデン、オーガニックのコミュニティーガーデンがあちこちに点在しています。そのコミュニティーのボランテ

ィアグループがボランティア活動として、いろんな人種、いろんな年齢が集まって、コミュニティガーデニングをすることによって、そのコミュニティのコミュニティ性が高まってくるともあります。ですから、これから横浜でも、都市部の中にガーデンとかをどんどん導入していけばいいと思うんですけども、場所があるかどうかというのは問題ですね。少し例を挙げると、私は毎日、三ツ沢上町から横浜国大まで歩いていくんですけども、行き方が2つありまして、1号沿いの大きい道路沿いのほうが早いんですけども、キャベツの畑を抜ける道があるんですよ。多分そのキャベツ畑を通っている道を通る人が多いと思います。そのキャベツの畑は、一応都市部の中にあって、朝にあそこを通ると、1日のやる気が出てきて、すごくやし効果がありまして、気持ちいいんです。

【部会長】 そうですね。ニューヨークのコミュニティガーデンは、いろいろな役割を持っていて、先ほどのアジアの話も、アジアから来られる方だけではなくて、もう少し幅広いアジアとの交流のお話をされたんだと思いますけれども、これからアジアの移民をどのような形で我々が引き受けてくるかということだと思います。

【委員】 違う国から入ってきた外国人との協力が必要と言ったのですが、アメリカでラテンアメリカからの外国人がいっぱい入ってくると、いろんな問題が出てきます。それをちょっと話したいと思います。私がサンフランシスコに住んでいたころに、投票の案内書が郵便で来るんですが、多分、4分の1が英語で、その残りがベトナム語、スペイン語と中国語になっています。ですから、自分の近くに住んでいる外国人とコミュニケーションをとるために、相当お金がかかるし、資源とかもかかるんですよ。それを、だれが払うかという問題も出てきます。また、アメリカのデトロイトにイスラム教、アラブ各国からの人がいっぱい入ってきていまして、彼らは豚を食べないんですよ。ですから、一般教育でイスラム教のメニューを出さなくてはいけないんですよ。全く豚とか入っていない食事とかを用意しなくてはいけないなど、外国人を吸収するためには行政的にお金がかかって、難しいですよ。それを理解していただきたいと思います。

【部会長】 そういう覚悟も必要だという、そういうことですね。ありがとうございます。どうぞ。

【委員】 横浜という政令指定都市の中に緑がある、そして農業がある。これは大変すばらしいことで、今話されているようなことを担保していかなきゃいけないと思います。実は、この前に、ある審議会がありまして、そこで、里山等も含めて緑を保全していきたいんですけども、なかなか税制その他制度の問題があって、それができないというような問

題があるんですね。私も、身近なところでは、ほんとうにいやしをいただける川があって、そばに里山があって、それがつい最近、宅地開発されてしまった。地権者はもちろん残したい、でもなかなかそうはいかないというようなこともあるし、それから同じように農業もそうだと思うんですね。そういったことを考えると、税制の問題だとか制度の問題だとか、そういった観点から考えないと、残したいと言っても、なかなか難しいんですね。だから、そういった部分では、特に横浜はそういった農業に対しても、それから緑地対策についてもしっかりと取り組んでいくということから、施策を推し進めていかないといけないかなというふうに思いますね。

それからもう1つは、横浜は、いわゆる浜なしだとか、いろんな特徴のあるものをつくってこうと一生懸命やっけていまして、観光農園だとか、朝とれたものを道路で売っていただいているとか、いろんなことがあって、非常に私どもも便利なんですね。そういったことからすると、観光都市横浜がなかなか宿泊を伴わないで日帰りで帰ってしまうということからすると、そういった地場産業、いわゆる農業でとれたものを含めて、何とかお土産で買って持って行ってもらえないかなと思います。それがいわゆる横浜の観光にもつながるし、横浜のことをほんとうにいいなと思っていただくところからいうと、本場があるわけですね。本場というのはいわゆる市場ですが、MM21のすぐわきに市場があって、今、これも制度の問題がいろいろあるんですけれども、観光客が来て、横浜中華街でおりてすぐ帰っていくというような流れを、農業だとか、農業でとれたものを見ていただき、都心部の市場で観光客に売れるような、そういった流れができるシステムをつくっていくと、MM21のような大都市でありながら、そのわきに帰り際に農業でもって頑張っていた作物があって、それがお土産で買っていけるとか、それから近海でとれたものがそこで売っているとか、こういったようなことも20年後に向けて考えていかないと、なかなか難しいのかなと思います。やはり国際化ということを考えていくと、制度の問題、税制の問題等も含めてしっかり見ていかなきゃいけないかなと。

もう1点、最後に言わせていただきたいのは、先ほど言った市民が国際化をどう認識するかという問題だとか、多文化をどう認識するかという問題、さまざま議論されてきましたけれども、全く同感で、私の子供がある保育園に行くと、障害者の子と一緒に育った。そうすると、全く障害者の子に対しての接し方が違って来る。それから、いわゆる老人ホームのそばにある保育園に、車を使ってわざわざ入れた方がいまして、そういったところの保育園へ行った子は、全くお年寄りに対しての接し方が違って来たということもありま

した。つまり、多文化、多民族との融合を一生懸命やろうというふうに大人が言っても、なかなか市民、いわゆる生活の中でそういったことが身についていかないと、なかなか難しいのかなと思います。そう考えると、英語教育がどうだという問題ももちろん一方ではあるんですけども、そういった乳幼児、保育園、幼稚園の時期から、そういったさまざまな方たちとのコミュニケーションが持てるような場をもっと横浜はつくっていかないといけないと思います。制度として、行政として何とか国際都市をつくろうと思っても、子供たちの意識の中に、肌で感じるぬくもりの中にそういったものがなくなっちゃうと、結局はただ、そこで言ってる言葉だけが上滑りして、実際問題、ほんとうにウェルカムという、外国人の方に来てもらうという接し方についても、なかなかできないのではないかと思います。そう考えると、やはり本来、国際化を子供たちに継承していくということから考えると、教育の面でもそういった場所の設定をしてあげないと難しいのかなと思います。横浜市が助成をしている保育園、それから、ある意味では応援していただいている幼稚園等も含めて、そういったものをつくらないと、なかなか20年後の国際都市横浜というのが難しいのかなというふうに思います。以上です。

【部会長】 ありがとうございます。どうぞ。

【委員】 先般、委員さんには農協でつくりました地域農業振興計画、これを見ていただくと、横浜の農業がわかっていただけだと思うんですが、実際に、一般の市民の人はわからないわけですね。だから、もっと知っていただくことが必要なんです、このような多様なすばらしい農業が展開されているわけです。

私が大分前ですけど、小学校のPTAの役員をしたとき、その小学校は県道を通らないと学校に通えない生徒が大勢いたんです。県道を通ると危ないから、農道を通学路に使わせてくださいと、その土地改良区の人をお願いして、農道を通学路に使わせていただいた。そしたら、あるとき、お母さんが子供に、田んぼで仕事をしている農夫を見て、勉強しないと、大きくなってああいうことをやるんだよ、ということをやった。それを農民が聞いたわけですね。そしたら、そんな指導をして農業を蔑視している親の子供は、農道を通させないと学校へ怒ってきた。ですから、農業というものは、そのぐらい今のお母さん方の見方がある。あるいは勉強しない人が農業やってるんだと、これはちょっとひどい話なんですけど、現実なんです。中にはそういう人が現にあるわけですから、やはり、農業というのが、この国際都市横浜の中で共通財産なんだという考えが皆さんに必要だと思います。

それと、農業専用地区って、まとまった農地があるところなんですけど、その農道に壊れた車を置いたり、農道から缶を投げ込む、そういう非常識なことがありまして、非常に都市農業というのはやりにくいということが現実にあります。今、どこかのタクシー会社が24時間、不法投棄を見つけたら警察に通報してくださる制度もあるようですけど、やはり市民、多くの人の協力がないと難しいと思います。それには、やはり市民の共有の農業だというような位置づけがないと、なかなかやっつけていかれない部分があるわけです。

それと、里山の話が出ましたけれど、里山も相続が発生すると、高い税金だから、それを売らなきゃならない。宅地になる。山では今、何の収入もないんですよ。何も収入がないから、どうしても手入れができない。いやし効果じゃなくて、何だこれはというような山になってしまうわけですよ。やはり何か維持するための施策というのがなくちゃならないのかなと思うわけです。

いろいろ、私ども農業者の組織としては、みずからやりながら農業を育てていこうとしているわけですが、そういう中で私どもも頑張っていきたいと思ったり、こういう中で横浜の農業の位置づけをお願いできたらなと思います。

【部会長】 里山と農業との関係というのは、どのように理解をしたらいいですか。里山は里山、農業は農業ですか。

【委員】 里山は、やっぱり地域の中でどう考えていくかですね。里山には、昔は薪炭林として、個人としても農業者としても必要だったわけなんですけど、今では、個人としてはなかなか必要もないわけです。今は、保水力とか、里山があることによって、単に水が流れなくていいというような環境的なもののほうが多いと思います。

【部会長】 どうぞ。

【委員】 私は、横浜の国際性とは何かという、意識の問題もあるけれども、持てる資源とありますか、それをアジアなり国際社会に提供していくということで、ビジネスも展開されるだろう、そういった技術力を生かした国際貢献というのが、これから大事になってくるだろうと思います。だから、私は以前から横浜版ODAプロジェクトなどを、経済局で立ち上げてはどうかと盛んに言っていたんですが、まだ実現していません。国のODAに負けないぐらいの、そういった横浜ならではの途上国への環境問題等を含めて技術援助、そういったプロジェクトを提唱しているんですが、なかなか実現しない。

と同時に、私は仕事柄、今、港湾局も担当なんですけれども、やっぱり横浜のこれからといっても、これは150周年も含めて、絶対議論しなきゃいけない、あるいは視野に入

れなきゃいけないのが横浜の港ですね。私は都筑で北部方面なんですけど、ほとんど港の話は会話には出てこない。そういった港と全然関係ない地域にとっても、横浜の港というものはやはり横浜経済の、あるいは横浜の都市の屋台骨なんだということをまずPRしていただくということが必要だと思います。この横浜の港が今後とも20年後、このまま推移するのかというと、やっぱり都市間の競争、特に東京港を控えているわけですね。コンテナの取り扱い量の資料が出ていましたけれども、東京に先を越されている。やはり都市基盤も含めて港の港湾施設の高度化というものを考えていかなきゃいけない。もちろん、一般市民から見ると、港にコンテナが入ってきて、それがどういった形で処理される、それが横浜にとってどうなのと、港湾で仕事をしている方と一般市民は、意識がかなり違うんですけれども、やはり横浜の100年後あるいは200年後を考えた場合、私は横浜生まれじゃないんですが、秋田生まれで、横浜で今、仕事をしていますけれども、やはりこの港をどう生かしていくかということが、アジア地域なのか太平洋地域なのか、あるいは国際社会の中で、あるいは日本の中で、それから国際社会の中でどう優位性を持ってやっていくのか、といったことが横浜の宿命じゃないかなと思います。今、都市農業の問題だとか、いろんな問題があります。やっぱり横浜を通して他都市へ流通させる。あるいは横浜で生産されたものは横浜港を通してアジアの地域あるいは他都市へ提供していくというような、やはり日本の中の拠点都市としての横浜港をどう再生させるか。再生というか、頑張ってるんですが、これからどうやってそれをやっていくかという視点が、今日まで話されてなかったんですが、横浜のイメージの中で港がやっぱり一番最上位に来ていたものから、親しみのある港づくりと同時に、競争力のある港づくり、それがアジアやあるいは世界に貢献するような、そういった機能をやはり高めていく必要があると思います。これは今、盛んに港湾局とやっていますけれども、そういう宿命だということをビジョンの中に入れていただければありがたいなと思っております。

【部会長】 関連してですね。先にお願ひします。

【委員】 今、港のお話をいただきまして、大変いいお話をさせていただいたと思っています。今日の資料の中で、国際港都横浜とひとくくりになっていますが、横浜という都市を考えた場合、今、おっしゃったように、一番、歴史的にも地理的にも経済的にも動かない特徴、これは港ですよ。港は動かない、歴史上も動かない。これを柱にしないで横浜という都市の運営は成り立たないと私は思います。それは港に2つあるわけですし、今、先生がおっしゃったような経済行為としての港湾機能、要するに港湾としての機能、これを

どうするかという問題がある。もう1つ、インナーハーバーのような観光その他に使うという意味での港、両方の意味があると思います。そのことは絶対に横浜という都市のビジョンを考えると置いてはいけない。今の港の問題で、やっていけるかなというんじゃなくて、港がなくなったら横浜でなくなるわけですから、やっていく道はあるという前提で考える必要があると思います。したがって、あり方をどうするかという問題は、例えば東京と両方でどちらが勝つかじゃなくて、東京とうまくやるということが必要だと思います。国際的なハブと競争するとかいったら、両方ともだめになると思います。

それから、地理的に、首都圏というバックグラウンドを持っている、先輩がつくった道路、幹線、そういうものを全部使った場合の港の位置づけというのは、これは首都圏の中でも、あるいは全国の経済行為の中でもなければならぬ、やっていかなければならぬポイントだと思いますので、これはもう絶対に柱にしなければならないという観点に我々は立つべきだと思います。やっていけるとかやっていけないというのは別の問題だと思います。とりあえず、関連でそれだけ、まず。

【部会長】 お二人のご意見との関連では、今日の検討素材で2番目に国際港都横浜の持つ独自の多彩な個性を世界にアピールし活性化する都市ということで、港、海洋を上に置いて、それ以外のことが輪としてつながるという表現がされているんですけど、そのような表現ではまだ足りないというご発言なのか、これはまさにご趣旨に合った表現だというふうに理解してよろしいですか。どうでしょうか。ご発言を聞く限りでは、もう少し港の表現を増やしたほうがいいと思うんですけど。概要図の表現は、かなりご趣旨に沿ったような図になっているんじゃないかと、私、個人的には思ったんですが、どうでしょうか。

【委員】 この部会の問題だけじゃないのかもしれませんが、全体としてビジョンをおつくりになるわけですから、横浜という都市はどういう都市になろうとしている基本があると思うんですね。それは今、港は、私が申し上げているとおり、歴史的にも地理的にも経済的にも環境的にも、絶対にこれは大きな柱であるんですよ、横浜にとって。それからもう1つは、人口が多いという現実があるわけですね。これも大きな柱なんですね。この数をどう考えるか。東京に近いということも、地理的に、東京に持っていかれるという意味じゃなく、東京という経済圏と近いという意味の、この横浜という都市の構造があると思うんですね。人口の中には、数だけじゃなくて、ここは質が高い。この質の高いところを生かすということは、絶対的に横浜のビジョンの中で柱立てをしなきゃいけない問題だと思います。それから地理的なことからいけば、今申し上げた、首都圏がある。首都

圏の中にあるということですね。

それからもう1つ、港の中には2つあるんでして、私は海の港と空の港があると思うんです。この空の港の羽田という問題も、ある時期からもう動かない、そこにあるものなんですね。これが国際化の問題が出ており、それがあから必然的にアジアなんです。羽田空港は、成田との関係で何十年とインターナショナルな、アメリカ等は使えないわけですから、したがって、そういうことからいっても、日本は両港を使っても横浜の置かれている立場からして、これはもうアジアなんです。そういうことをきちっと私は基本的に施策を整理なさるときに、柱立てをしていただいて、そういうことを市民の皆様方にも、こういう都市なんですよ、港の景観は大事なんですよ、横浜の財産ですよ、というようなことを言える都市計画でなければいけないと私は思います。この財産を、ただ経済行為で使うことのないようにと言えるような、そういうことが通るような都市づくりをしなければ、私はいけないと思います。さっき、ガーデンが都市部にあつたらいいなという意見がありました。これも都市計画のやり方によってはできると思います。そういうことをはっきりと、ビジョンの中に訴えていただきたいと、そういう感覚を訴えていただきたいと思います。

【部会長】 どうぞ。

【委員】 一言だけ。港の機能だとか親しみという話以外に、現実問題として市内から出る建設残土の問題、それから最終産業廃棄物の処理、これは南本牧の処分地、埋め立てを今、現実にやっています。それから、今後埋め立てもやりながら、港は先ほど言った環境問題にも非常に貢献していると、そういった機能をもう1回見直す。それから災害時のいろんな支援も港から他都市へ応援に行くとか、安全性、それから環境問題、そして環境問題でも、そういった廃棄物だけじゃなくて、先ほど話の出ていました新エネルギーの風力の活用といった面もあります。また、私、たまたま帆船日本丸に乗っていたことがあるんですけども、帆船日本丸、今後どうしようかという話をしているんですが、あれはエンジンなくても動くわけです。海洋思想の普及だけではなくて、子供たちの海へのあこがれだけじゃなくて、環境にどうこれから貢献していくかという1つのシンボルとして私は日本丸を活用したほうがいいんじゃないかと思っています。そういった港をすべての都市づくりに関連づけながら持っていくという発想がいいんじゃないかなと思っています。以上です。

【部会長】 すいません、お待たせしました。

【委員】 ありがとうございます。港に関しては、まさにそのとおりだと思うんですけども、今、スーパー中枢港湾という指定の中で、京浜港という枠組みの中で、東京でも千葉でもない、川崎でもない、横浜がイニシアチブをとって京浜港全体の開発を横浜が中心になって考えていく、そういうことが横浜にとって一番必要なんじゃないかなというふうに思います。

それと、日本丸に関しては、ぜひ我々の仲間が日本丸を外に出そうと運動している者もいますので、ぜひおっしゃるとおりだと思います。風力というのは大事なことだと思います。

あと、具体的なアイデアということだったので、これは先ほどからちょっと申し上げたかったことなんですけれども、大きく分けて2つあります。1つは先ほどの農業のときに、ちょっと思い出していたんですけれども、青年会議所の全国大会なんかがありますと、いろいろな地域のスローフードですとか、地域でつくっている名物などをみんなで出し合う機会がありまして、横浜は何だと言われると、大体ほかの都市の人たちから言われると、シュウマイでしょうと言われます。シュウマイというのは別に横浜のスローフードではなくて、横浜じゃないところから出来ているものだと思います。そういう意味で、例えば農業の分野の中でも、横浜の名物と言えるような名産品みたいなものを何かつくってもらい、そんなことを特徴にして横浜の都市農業みたいなものを考えていってもらいたいのではないかと思います。例えば具体的に果物とかではなくても、果物を使ったパイやケーキみたいなものをつくってみるとか、そういう中で横浜名物みたいなものを何かつくってもらえたらいいかなとも思いますし、例えば、金沢区なんかですとアナゴがとれたりですとか、シャコがおいしかったりですとか、江戸前のお寿司なんかのネタになるわけですけども、そういうのをもう少しスポットを当ててもらって、横浜名物という、例えば横浜パイですとか、横浜の梨を使っておいしいんですよとか、そんなものをどこの外国に持って行っても横浜のあれが食べたいというふうに言われるとか、そういうことも1つ具体的なアイデアなのかなとも思います。

それともう1つは、2002年のワールドカップのときに、我々、横浜青年会議所で提案をさせてもらったんですけども、32カ国出場国の全部の国の、いくつか重なっている部分はあるんですけども、せめてありがとうとこんにちは、それぐらいはだれでも言えるようにしようという運動を提案したことがあります。例えば国際人の人材育成みたいな部分でも、国連加盟の国であったりとか、アジアのカンボジアやベトナムだったり、ト

ルコだったりとか、そういう国のありがとうとかこんにちはとか、基本的な言葉を2つか3つぐらいでいいと思うんですけども、そういうのが横浜の子供は小学校のときにみんな教えられ、それが大人になっても何となく覚えていて、どこかの国の人と会ったときにはありがとうとこんにちはぐらいは、言えるといいのではないかと思います。最初会ったときにいきなりハウ・ドゥー・ユー・ドゥーと言われるよりは、自分たちの国の言葉でこんにちはということと言われたら、すごくうれしいと思うんですよね。何かしてあげたときに、ありがとうという言葉で自分たちの国の言葉で言われたら、すごくうれしいと思うんですよね。グローバル化っていうのは、決してアメリカンスタンダードではなくて、いろんな国の言葉を1つでも2つでもいいから何か覚えてて、それがたまたま会ったときにぱっと出てくるみたいな、そんな教育もひとつ国際人の人材育成としては大事なんじゃないかなと思います。

そんな2つのことを提案させてもらえたらと思います。

【部会長】 ありがとうございます。どうですか。横浜名物という話。

【委員】 今、行政のほうのご指導の中で、横浜にもふるさと助成組織が、いろいろな加工品もつくっています。それなりにつくってはいるんですが、何せ規模も小さいし、やっぱり外にまだそれだけ出てないんですよね。直売所をもっとまとまったもので市民にPRし、それで理解してもらおうようなことも必要だと思うんですが、今の直売所ってまだ規模が小さいですからね。やはり、アンテナショップ的なもので、もっともつ外に向けての大きなPRをすることによって認知されるんじゃないかなと思っています。それぞれ、自分でつくったものは自分で値段をつけて売るのがじゃないと、なかなか採算が合わないわけです。やっぱり自分のつくったものに誇りを持って、それを商業ベースにしていくことが大事なんですけど、何せ規模が小さいということと、外に向けて、まだまとまってないから、なかなかPRできない。正直言いましても、浜なしは相当いいブランドになっていますが、一般の市民にはなかなか量的に、買えないというような状況なんですよ。

【部会長】 この前いただきましたけど、甘くておいしかったです。

【委員】 よくお話を聞く中で、今までこんなおいしい梨食べたことないという話を聞きます。

【部会長】 どうぞ。

【委員】 この検討素材の中の2段目の表なんですけれども、港とか歴史とかものづくりとか観光コンベンションだとか、この図なんですけど、これ、横浜のいわゆる地域というか

方面というか、地域の特性を生かした表現になっているんじゃないかなというふうに思うんですね。例えば港であれば臨海部ですね。それとか金沢の漁港であったりとか。ものづくりであるならば、京浜工業地帯だったりとか、あるいは内陸部の都筑だとか港北にあるようなコンピューターの集積産業であるとか、そういったものを活かしたりとか、観光であれば港の周辺部、MM地区だとかというようなところを表現しているんじゃないかと思います。言ってみれば、横浜にはいろんな顔があって、それぞれ特徴があると、こういうのを表現しているんじゃないかと思うんですが、ものすごく当たり前のことなんですけれども、当たり前過ぎて多分これには出てこないんだと思うんですが、一番大切なのは横浜市民が住んでて憩い、はぐくむ、自分が住まいとしているという住環境としての横浜という顔あると思うんです。例えば私は青葉区に住んでいますけれども、青葉区は住宅開発をして、どんどん人口が多くなっていったまちづくりをしてきました。港北ニュータウンなんかもそうですけれども、もちろんその中には水、緑、農業、環境という一面ももちろんありますが、ほとんどは住宅街の地域なんですね。そういったところが横浜の市内にいろいろなところにあると思うんですけれども、こういった人が住んでいるという一面、顔、これも横浜の大都市としての顔じゃないかと思います。

そうした住宅街では、どういう方向性を我々は持たなければならないのかということですが、1つの例を挙げると、大都市がゆえに立ちおけている部分というのがあります、例えば北部の緑、青葉、都筑、港北には公の公式野球場が1つもないんです。この中に約60万近い人が住んでいますけれども、その中に公式野球場が1つもないんですね。例えば隣の大和とか綾瀬とか海老名、これはもう1つの市で公式野球場を1つ持っていたりしますが、こういった人が住んで憩い遊べるまちづくりという一面をやはり横浜市の大都市個性の中で、今後どういうふうに表現していくかというのが課題なのではないかと思います。

【部会長】 今のお話は、むしろ2段目じゃなく3段目に事務局としては表現しているつもりじゃないかと私は理解しています。多様な住宅地、しかも個人が楽しめる公式野球場が実はないというのは、楽しみが足りないのではないかと、そういう説明を3段目でしているんじゃないかと思います。

【委員】 1つ追加でいいですか。

【部会長】 今に関連ですか。

【委員】 いや、さっきの不足分の追加です。

【部会長】 ちょっと待ってください。

私も横浜の1つの特徴は、20世紀の典型的な良質な郊外住宅地をつくった部分というのがあると思います。足りない部分は当然あるんですけど、しかし、日本の中で郊外住宅地として、20世紀つくってきた住宅地の中の比較的、かなり良質な郊外住宅地を横浜は持っていると思っております、それをどのように次の時代に引き継いで維持していくかということもかなり重要な横浜市のこれからの政策です。ここに多くの方が住んでらっしゃるはずですよ。そのことも、やはりメッセージとして出していくということが私は重要ではないかというふうに思っております。

【委員】 その視点の中で、例えば今、先生おっしゃったように、新しくつくられたまちですから、いちどきに同じ世代の人が移り住むんですね。ですから、例えば30年前にできた団地などは非常に今、高齢化が一気に進んでいます。これがその方々が世代がわりをすると、また新しい世代が入ってくるわけですけども、そういったように、ニュータウンのいい面と悪い面と、特徴でもあり、あるいは反面な部分もやっぱりあるということを確認する必要があると思います。

【部会長】 実は、今日の午前中に、国土交通省でニュータウンのオールドタウン化、それを新しく都市再生、どういうふうにやっていくかという議論をやってきたんですけど、まさにその議論だと思います。

どうぞ。

【委員】 先ほど、横浜のブランドと言われましたが、横浜でも農畜産物のブランド品があるんですよ。地場野菜ブランドのハマッ子なんていうのは、やはりシールが張ってあります。また、やまゆりポークというのは神奈川県下の養豚農家。

【委員】 高座豚とか。

【委員】 ええ。それから横浜ブランドのはま菜ちゃんとか、市内産の野菜でね。いろいろあるわけですけど、大きな都市の中での絶対量が少ないですから、やっぱり一般に認知されないわけですね。

実は今、私どもの農協の組合員で感謝の集いというのをやっているんですが、あしたのお昼に、美川憲一に来てもらうことになっています。そのところに、タモリの「笑っていいとも」という番組で美川憲一が紹介されるらしいんですが、美川憲一が、きょうは横浜農協さんのコンサートに来ているということで、そこで電話応対するらしいんですね。おみやげに浜なしをタモリに持っていきらしいんですが、そうすると電話が来ちゃって困る

よと生産者が言うくらいなんです。やっぱり対応がし切れない、そういう問題がこの浜なしにはあります。さっき言ったように絶対量が少ない。だから、生産者は逆にあまりPRしてくれるなど。でも、農協とすれば、横浜農協の浜なしをせっかくメディアに載せてPRしてくれるんだから、大きくJA横浜の浜なしを出せというようなやりとりを今日もやったところですよ。

【部会長】 うらやましい話です。

【委員】 そんなことで、ブランド品もないわけではないのですけどね。

【部会長】 いろいろご意見をいただきまして、かなり検討素材を豊富にすることができたと思います。議論する予定の時間がほぼ尽きてございまして、まだ言い足りないという方が、もしいらっしゃったら、1、2分発言いただいて最後にしたいと思います。よろしいですか。

実は次週、後からお話がございますけれども、今日の審議をベースにして事務局と調整の上、第2部会の中間まとめとして来週火曜日、第1回の起草委員会があります。その第1回の起草委員会にまとめとして出さなければいけません。

事務局から説明をお願いします。

【事務局】 今日いただいた意見、まず資料1のほうはすべての意見をできるだけ具体的に書くということを役目にしていますので、紙は枚数が増える形になると思いますが、資料1のほうはすべて入れさせていただきたいと思います。これもできれば起草委員会のほうに、どのぐらい説明できるかわかりませんが、お伝えして、具体的な提言を出していきたいと思います。

また、都市像のイメージのほうは、今日のもので、例えば港の関係でありますとか農業の関係とか、環境問題の関係とか、それから国際貢献、アジアの関係、さまざま出たものを、できるだけ具体的なコメントを加えるとともに、それを若干、抽象化することにはなるとはありますが、要素として入れ込んで13日の起草委員会に提出したいと思っています。

【部会長】 もう1つは、先ほど委員からもお話のありました、そもそも構想のつくりをどのようにするかという点があります。もう少し具体的な話を言葉だけではなくて、具体的な中身をそれにつけ加えているというような構想はどうか、他都市の構想のご意見がありましたので、その辺も起草委員会で少し議論したいと思います。

【事務局】 3部会、それぞれ議論の仕方が若干違っておきますので、ちょっと調整を図りますが、できる限り具体的な事例も入れ込んだ構想の形がいいのではないかとということ

を、第2部会からの提案とさせていただきたいと思います。

【委員】 ちょっとよろしいですか。例えば、先ほど他都市を例に挙げましたが、いきなり一番初めに、人口5万人のまちを目指すと書いてあるわけです。いきなり数字があって、我々の明確な目標はここにあるんだというようなつくり方をしていますので、非常に市民、読み手がわかりやすいんじゃないかと思います。

【部会長】 それでは、予定の時間になりましたので、そろそろこの辺で終わりにしたいと思います。

次回の日程は、事務局からご連絡いただけますか。

【事務局】 次回は10月5日になります。冒頭申し上げましたけれども、前半の1時間は総会をやらせていただきまして、後半1時間は部会という形でやらせていただきます。

【部会長】 部会で1時間だけ議論するというのは難しいと思いますが、もう少し延びてもいいですか。1時間半ぐらい。もし話が延長した場合には、1時間半ぐらいに延びるということをご承知おきいただいて、部会を10月5日に開きたいと思います。

それでは、これもちまして第3回の第2部会を閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

— 了 —